

# フィールド風

(現場)からの

宮田守男

山岳部や寒冷地から次第に紅葉便りが届く季節、朝夕の涼しさに半袖から長袖に衣替えした人も多いはずだ。日本の1年を72等分し、季節それぞれの出

来事をそのまま名前にした七十二候で、来週の13〜17日は「菊花開(きくのはなひらく)」。秋を代表する花の菊が咲き始める頃だ。

菊は奈良時代から平安時代ごろに渡来し、無病息災と不老長寿の薬効があるとされ、菊の節句(重陽)には菊の花を浸した菊花酒を飲む習わし

や重陽に摘んだ菊の花びらを乾かし、それを枕に詰めると、菊の香りが漂う夢枕になり、その枕で眠ると恋する人が夢に現れると言われ、女性から男性に贈り物にされる菊だが、葬儀などのお別れの花

という印象が強い不思議な花でもある。近づきすぎず、少し離れたところで愛でたいとの鑑賞法をなぜか納得してしまう。

縁起担ぎによる言い換えは昔から親しみよく使われたが、若者には通じない言葉になり

つつある。梨が「無し」に通じると「ありの美」、しょうゆは頭から「しし死」の音が入るので見た目の色から「むらさき、葦(あし)は悪(あく)しにつながら」と「ヨシ」、金

を擦る」と連想させるため「アタリメ」。縁起の悪い言葉を言い換えすることができると、今では言い換えしない表現が当たり前になってきている。

歌人・斎藤茂吉の息子である随筆家の斎藤

茂太さんの著書『いい言葉は、いい人生をつくる』は著者が知恵ある言葉に出会うたびに書き留めたメモを編集したものだが、異国の地で使われる言葉の使い方には魅力ある観光資源に違いない。現代の

## いい言葉で観光魅力を創造しよう

ネット社会では、一度発した言葉が延々とコピーされ拡散され、容易に消せず、忘れたころの端に上る今だからこそ、当たり前前に使っている観光要素を、地域の魅力である方言と共に活用するの

NHKの「チョコちゃん」で人はなぜ、旅に出るのかの問いに「それは人間の性だから」、旅の実現に必要なものは道具を生み出す知恵、情報ネットワーク・好奇心。人類はこの三つを備えていると話題にした。松尾芭蕉の「奥の細道」の



森上シニアクラブ「緑森会」の地域施設でのボランティア作業。地域愛が地域の良き景観を継続させる

書き出しは「月日は白代の過客にして、生きかふ年もまた旅人なり」と。旅の持つ魅力(信州地域社会フォーラム会員・白馬村森上)